

日本の南蘋系画家研究資料

はじめに

享保十六年（一七三一）の暮、長崎へ到着した南京船で来航した浙江省呉興出身の専門画家・沈南蘋（名は銓、一六八二～？）は、写生体を駆使した新奇な花鳥画様式を日本へ伝えた。南蘋は享保十八年九月に回棹するが、引き続き門人たちを長崎へ送りこんだ。南蘋画風はときの將軍・徳川吉宗の氣に入るところとなり、日本でマーケットを獲得することに成功したのである。長崎で南蘋が指導した唐通事の神代甚左衛門（一七一二～七二）は、画名を中国風に熊斐と称し、南蘋工房の日本支店のような役割をはたした。彼が長崎で開いた画塾へは全国から入門者が集まり、南蘋の画風は急速に日本中の画家たちへと拡まっていく。

そうした画家を総称して南蘋系あるいは南蘋派と呼ぶのだが、その影響を受けた画家たちは、直接間接を含めれば膨大な人数に上り、

成 澤 勝 嗣

個々については研究の進まない作家も多い。長崎郷土史の泰斗・古賀十二郎氏の『長崎画史彙伝』はそうした画家の伝記資料を丹念に収集した先駆的な業績であるが、惜しむらくは研究対象を長崎を本貫とする画家に限定されており、全国的規模で拡大した南蘋系画家を網羅するには至っていない。本稿は、古賀氏の驥尾に付して何とか南蘋系画家研究の拡張進展を図ろうと企てたのであるが、筆者がこれまで寓目した資料から得た知見を羅列したのみで、通説的な記述は省略した。なお引用文中の細字双行註は（～）に入れた。

【沈南蘋とその門人たち】

○土佐に生まれ、宝暦九年（一七五九）から安永九年（一七八〇）までの間を江戸に僑居した文人画家中山高陽（一七一七～八〇）は、郷里の友人に宛て、江戸における南蘋画風の流行ぶりについて報じた。子雨君（岩井玉洲）宛書簡（年不明六月七日付、明和初年と推

定)がそれで、「○沈南蘋、鄭培、高鈞ナド、巧ハ不可云候へ共、格低ク元明ノ画トハ大異ニ候。満天下是ヲ学候事ニナリ、弥以一解ヲ降候歟。然ドモ弁駁スル人モ少ク候。」と記される。高陽の画論『画譚鷄肋』にも似たような評言を見ることができが、ここでは鄭培や高鈞といった南蘋門下の画家たちの名前までが具体的にあげられている点が注目される。

(参照) 清水孝之『中山高陽』、高知市文化振興事業団、一九八七年

○姫路藩主酒井忠以(一七五五〜九〇)は自らも宋紫石・宋紫山親子に学んで南蘋系の絵をよくした文人大名であるが、その『玄武日記』の天明三年(一七八三)七月八日条は「一、陽明家より御使、南蘋筆掛物拝領之」と記し、京都の近衛家から沈南蘋の作品をもたらっている。南蘋画が権門間の贈答品として使われたことを示唆する。忠以は近衛家の和歌の門人であった。

(参照) 「翻刻 玄武日記」(七)、『城郭研究室年報』第一八号、二〇〇九年、姫路市立城郭研究室

○彦根藩井伊家に伝来した鄭培筆「柏鹿図」が彦根城博物館に所蔵されている。

(参照) 「彦根城博物館だより」四四号、一九九九年

○高鈞の「虎嘯図」粉本を江戸の南蘋派画人諸葛監(清水静斎)が所有していた。江戸の儒者亀田鵬斎の『鵬斎先生遺稿』には

高鈞字輔皇畫虎嘯図、余友人湖南老人所臨也、老人姓諸葛名監、湖南其號也、老人每觀古人畫必臨而藏之、其精工用意者皆此類也、已積滿筐沒後散落不知其處、可惜哉、今觀此本不堪感焉、壬戌六月十六日鵬斎老人鑒定、

と記す。壬戌は享和二年(一八〇二)、諸葛監没後十二年を経た回想は、鵬斎と諸葛監との交友を物語る資料としても感慨深い。

(参照) 杉村英治編『亀田鵬斎詩文・書画集』、三樹書房、一九八二年

○やはり沈南蘋門人で長崎へやってきた清人高乾筆「春王双喜図」(橋本コレクション蔵)は、作品の落款に「含山高乾寫」とあり、背面に貼られた高乾自筆の賛詩文には「石門高乾拝稿」と記す。この「含山」と「石門」は高乾の本貫を示すと思われる。諸橋轍次『大漠和辞典』の「石門」の項をひくと、石門山は安徽省含山縣の南にあると記されており、高乾はこのあたりの出身ではなかったかとも考えられる。従来は浙江省崇德縣石小鎮の人といわれている。このことは以前すでに指摘したことがあるが今一度再録する。

(参照) 神戸市立博物館特別展「日中歴史海道二〇〇〇年」図録、

一九九七年

【熊斐・真村蘆江・森五石】

○田能村竹田が自らの所蔵印を捺した『竹田印譜』に「式笑」「游戲」印を収載する。この印には「熊斐刻」の銘があるといい、さらに竹田が自註を加えて

右弥（繡カ）江熊斐刀凍石印一顆、崎人真芦江者得之、伝之
吾日田郡人森春樹者、頃春樹遊吾邑、因得留覽數日矣、弥江善
画、世固知之、而鉄筆精巧風韻亦想見其為人也、豈尋常画史之
流哉、梅月主人亦弓、吾輩好事之士觀之以為如何、

とその伝来を記す。また安政六年刊行の別本『竹田印譜』にも同印を載せ「崎人熊斐善画有名、亦善刻、杜春樹嘗藏二印、宛然文伯仁遺韻」と記される。

すなわちこの印は熊斐（号は繡江、一七一二〜七二）が篆刻し、それが門人の真村蘆江（長崎の人、一七五五〜九五）へ伝わり、おそらくさらに蘆江の弟子である豊後日田の森五石（一七四七〜一八二二）へ譲られたものと思われる。五石の嗣子である森春樹（一七七一〜一八三四）がこれを継承し、やがて竹田の手に渡ったようである。森家は日田隈町の豪商で豊後竹田の地にも酒造用の別邸をも

ち、毎年親子ともども田能村家を訪れていたことは『竹田莊師友画録』に記されている。

（参照）佐々木剛三『竹田』、『東洋美術叢書』、三彩社、一九七〇年

○また森家には、真村蘆江から同様の経緯でもたらされた熊斐の絵手本六巻があった。長崎歴史文化博物館が所蔵する「寛政年中作儒家五名書卷」は、森五石親子がその絵手本巻に序を付すべく、豊後岡藩儒唐橋君山を仲介役として各地の文人に揮毫を依頼した詩文集めたもの。倉成龍渚（中津藩儒）、松井羅州（大坂の人）、安原方斎（伊勢久居藩儒）、岩瀬華沼（盤行言、島原藩儒）、岳東海（三河生まれ、江戸の儒者）の五名が序文を寄せている。そのうち安原方斎のものを抜粋する。

森子賓（五石）之家藏其（熊斐の）臨本数幅、（中略）熊氏授之其門人蘆江村彦字斐瞻、々々授之森常勝字子賓、子賓豊後日田郡人、学画蘆江深得其師法、此圖熊氏之所愛襲而再傳附子賓、可謂能繼衣鉢者矣、予固不知繪事又未識子賓、依吾友唐君山之請、略序其来由以贈之、

ここで真村蘆江のことを村彦と呼ぶのは初見である。ただしこの「寛政年中作儒家五名書卷」に熊斐の絵手本は付属せず、本体は散

逸したと思われる。

それに関して、森家伝来のこれら絵手本の一部ではなかったかと思られる「繡江先生蘭竹画譜」(大阪・個人蔵)が存在する。三巻のうち二巻は「蘆江河文俊」と「崎水霞江」による粉本であり、サインのみで印はない。真村蘆江の実家が河内屋と称したことを思えば、河文俊すなわち真村蘆江である可能性も残るが、崎水霞江の方は不明。残る竹譜の一卷は『芥子園画伝』に倣った内容で、巻末に「繡江」の款記と「熊斐」「繡江」の二印を捺してあることから、熊斐自筆の絵手本である。本来別のものを取り合わせて三巻一組にしたと思われるが、その収納箱側面に「亀翁山下 悠然亭森五石珍藏」の墨書が記されている。亀翁山(亀山、日隈山とも)は日田隈町の森家から三隈川越しに臨む景勝の地で、悠然亭は五石の隠居所の号であったという。

○関宿藩士・池田正樹の『難波嘶』安永二年(一七七三) 閏三月の条に「同廿七日晝時より兼葭堂の許へ行て對話す。(中略)長崎の畫師神代甚左衛門(クマシロ) 畫名熊斐、字淇瞻、號繡江。神代ハ淡州の地名也」沈南蘋門人にて上手なりしが、去年十二月廿八日に下世す」とある。熊斐の忌日を正確に大坂へ伝えているが、文中に見える淡路国神代と熊斐との関連は不明。

(参考)『随筆百花苑』第十四巻、中央公論社、一九八一年

【諸葛監】

○江戸の南蘋派画人諸葛監(一七一七〜九〇)について、青柳東里は天保三年(一八三二)刊『続諸家人物志』で「初ハ熊繡江カ畫法ヲ学フ、後ニ元明ノ諸家ニ倣ヒ専ニ花鳥ヲ画ク、コレヲ以テ一時ニ行ル、蓋シ江戸ニテ荆関董巨ノ風ヲ唱ヘ探幽雪舟等カ風ヲ嫌フ者ハコノ人ノミナリ、安永中ニ六十余ニシテ歿ス、百卉画譜ヲ著ス」と記す。雪舟や狩野探幽すら嫌うという諸葛監の過激な中国趣味についての証言である。『百卉画譜』はその現存を知らない。

(参照) 青柳東里『続諸家人物志』、森銑三・中島理壽編『近世人名録集成』第三巻所収、勉誠社、一九七六年

○岡田枬軒著『近世逸人画史』の諸葛監の項に「伊勢外宮文庫の襖表は源應舉の墨竹、裏は諸葛氏の著色岩石に孔雀なり、余勢遊の時目撃せし所なり」という。

(参照) 坂崎坦編『日本画論大観』、アルス、一九二七年

○同じく『近世逸人画史』の諸葛監の項は、その出身を「東都兩國米澤町の人」とする。また彼が宝暦十年(一七六〇)に描いた「一路功名図」(京都・個人蔵)には「家在昌平第二橋」の遊印があり、聖堂のあたりに住んだこともあるようだ。また『雲室随筆』の諸葛

監の項には「所々に移住しけるが、予は中村弥太夫（仏庵）と同道にて初て訪たり、其ときは浅草観音寺中お多福辨天の地面に居たりけり」と記される。

（参照）『雲室随筆』、『続日本随筆大成』第一巻所収、吉川弘文館、一九七九年

○石島筑波（一七〇八～五八）の『菱荷園文集』巻四には「題滕子文畫厨」と題して「主人圖寫工 愛惜貯斯中 慎勿寄靈寶 通神恐御風」の五言絶句を載せる。子文とは諸葛監の字であり、彼が粉本を貯えていた箱に題した詩かと思われる。

先に高鈞の資料として挙げた『鵬斎先生遺稿』の「余友人湖南老人所臨也、老人姓諸葛名監、湖南其號也、老人每觀古人畫必臨而藏之、其精工用意者皆此類也、已積滿筐沒後散落不知其處、可惜哉」の記述と合致する。

（参照）石島筑波『菱荷園文集』、『詩集 日本漢詩』第十四巻所収、汲古書院、一九八九年

【松林山人】

○熊斐門人である松林山人（？～一七九二）の書簡が大阪府立中之島図書館所蔵『名家手簡』（甲和八二五）に収録されている。

（別筆）松林山人 長崎奇人」

昨日者御光駕被下忝奉存候、愈御安寧奉恭意候、随而近比増薄之至り二御座候へ共、方金百疋奉献候、誠上巳御祝儀申上度印迄二御座候、御笑留被成下候様奉希候、頓首 三月二日 尚々御葉頂戴仕度奉願候、頓首

（封書）片倉仁兄 松林頓首」（別筆）俗稱松林早次工墨竹花鳥人物崎陽人」

この前に貼られた諸葛監の書簡が「片元周」なる人物宛てであることと、追伸で薬を所望する本書簡の内容から、宛先の片倉仁兄とは江戸の医者片倉鶴陵（名は元周、一七五一～一八二二）と推定される。

○奥州塩竈生まれの画人小池旭江（一七五八～一八四七）は二十代前半に江戸へ出て、松林瑤江から南蘋流の花鳥画を学んだ。この松林瑤江とは松林山人のことで、実際に「瑤江」印を捺した作品も散見できる。

（参照）『小池旭江の絵画』小池旭江没後一五〇年記念の会実行委員会、一九九七年

【益田雕軒】

○長崎で熊斐から画を学んだという堺の益田雕軒（一七三二～九八）なる人物が頼春水の『在津紀事』に登場する。

界府益田雕軒（高豊卿、字孟文、稱次兵衛）亦及見蛻岩、年少不多記一二傳説或可聽也、雕軒遊長崎再三、善道高君秉熊斐事、雕軒書與詩皆有趣、畫學之於熊氏、真率超凡、猶其人也、後余遇之江戸一再、

と春水は記す。この益田雕軒は『堺市史』別編（第七卷、一九三〇年刊）によれば本姓高木氏、通称を具足屋次兵衛。堺で代々続く豪商具足屋の十二代目で、惣年寄役及び絲年寄役を勤めた。絲年寄役を以て屢々長崎へ赴き、熊斐から学んだというが、その実際の絵画遺品を見たことがない。ちなみに長崎の文人趙陶斎を自らの別墅へ迎え庇護したのはこの人であった。寛政十年十月十八日没、享年六十七という。

（参照）頼春水『春水遺稿』、『詩集 日本漢詩』第十卷所収、汲古書院、一九八六年

【岩井江雲】

○熊斐門人と思われる逸伝画家・岩井江雲（生没年不詳）の描いた大横物「唐山水図」（大阪・個人蔵）には「戊申仲秋寫 南溟江雲巖皎」の落款があり、天明八年（一七八八）の作。箱書に「寛政元年酉春 小笠原左京太輔様拝領」とあり、制作の翌年に小倉藩主小笠原忠総より下賜された品と見られる。また徳山市文化会館の「朝倉南陵・震陵展」（一九八五年）図録に掲載される徳山藩の画家朝倉南陵の伝記資料によれば、南陵は天明六年に江戸で「小笠原侯の画家岩井江雲」から漢画を学んだといい、どうやら江雲は小笠原家お抱えの江戸詰め絵師であった可能性がある。

【宋紫石・宋紫山】

○平賀源内著、宝暦十三年（一七六三）刊『根南志具佐』に、歌舞伎の女形瀬川菊之丞を讃えて「雪溪が花鳥も色を失ひ、春信も筆を捨」という。雪溪は宋紫石（一七一五～八六、のち雪湖）、春信は鈴木春信であろう。

（参照）『平賀源内集』有朋堂文庫、一九一五年

○姫路藩主酒井忠以（一七五五～九〇）の『玄武日記』に宋紫石・

宋紫山父子の記事を散見する。

安永五年（一七七六）正月二十二日「一、今九ツ前小左京来ル、終日咄馳走、雪湖画并玉秀、権三郎一張、金剛三郎、宇平次出ル、帰座暮六半過也、」小左京は豊後小倉藩主小笠原左京大夫忠総か。雪湖は宋紫石である。

同三十日「一、五鳳へ手紙并雪湖雪溪画遣ス事、」五鳳はやはり小笠原左京大夫忠総の俳号であるという。

同八年正月十五日「一、帰宅後（黒はぶたへ菜種麻半）着用、年始ふるまひ小書院に而、客揃ニ而出あいさつ、（中略）料理済而居間へ通シ、席画馳走（楠元雪湖、同雪溪、家来玉舟）、画之内餅菓子、名酒出る、画之内出坐、尤多葉粉盆も出る」

同年八月十三日「左之通印自刻あたし、楠本雪溪に遣ス事

（貼紙）（待ツミ知己ヲ於後ニ）印 ツマミ獅子 臘石」

この雪溪は宋紫石の息子宋紫山のことであろう。

同十年正月十五日「一、如嘉例今日年始ふるまい有之、客揃に而小書院へ出席（着用ふくさ麻）あいさつ、直に勝手座敷へ出、あいさつ、（中略）料理すみ、両坐敷客一同居間へ通り、茶盆出シ出座、あいさついたし引、雪溪親子席画、右絵之内出席すミきはに退坐、尤此内餅菓子、名酒出る、シヤウバン不致事」

天明元年（一七八一）八月十一日「九半時彦根中将来臨、於奥杯事有之、夫より表におゐて料理、夫より雪溪出、画有之事、

七半時被帰候事、外無記事」

同三年正月十五日「一、如嘉例今日年始ふるまい（并二旧臘拝領之御鷹之雁披之）（中略）料理後両坐敷之客居間へ通ス、多葉粉、茶出、畢而出席、直二絵はしまる（雪溪、永甫）画認也、餅菓子、名酒出る、其以前勝手へ引」

同年二月三日「一、四時過内蔵殿へ相越、茶事有之、相客（縫殿との、楠本雪溪）、茶後鞠有之、帰宅暮過也」

（参照）「翻刻 玄武日記」（二）（九）、『城郭研究室年報』第一二（二〇号、二〇〇三）一一年、姫路市立城郭研究室

○津和野藩亀井家に伝来した摺物のうちに宋紫石の大小歳旦が二点含まれている（浮世絵太田記念美術館蔵）。すでに安村敏信氏が紹介されたものであるが、その概要を記す。一枚は「桐に鳳凰図」で安永九年（一七八〇）の歳旦。円相外の右下に朱で大小月を摺り出し、左上に藍字で「鳳舞于庭」と題したうえで「安永九年正月 宋紫石寫」の款記に「紫」「石」の印影がある。もう一枚は翌安永十年の歳旦である「貝尽し図」。円相内左上に藍字で「七宝満堂圖」と題する。右下円相外に朱字で大小月を記し、その下に藍字で「安永十年辛丑正月 宋紫石寫」の款記に「紫」「石」の印影がある。

（参照）板橋区立美術館「宋紫石とその時代」展図録、一九八六年）

○また平戸藩の文人大名松浦静山が蒐集した『大小賀歳旦』帖（松

浦史料博物館蔵）中にも、宋紫石原図による「水辺書斎図」がある
 【図1】。落款は「宋紫石寫」と記して印なし。左方に記された句は、

歳旦はとし／＼同句を用るを佳例とす、依て爰に贅せず

春興 春風樓和水

手入せぬ松も千とせのみとり哉

守歳

米 よね祝ふ暮迄買ん市の升

甲辰春

甲辰は天明四年（一七八四）にあたり、紫石七十歳。また二句目の冒頭に付された「米」字は、この摺物が大和郡山藩主柳沢米翁と関わりのあることを暗示する。

○同じく松浦静山の随筆『甲子夜話続篇』巻十七に宋紫石の娘の記事あり。

一、亡夫人の世にありしとき、木面^{コノモ}（宋紫石と云し画工の娘なり）と云し十二三の女小姓あり。宴を設けし折から、銚子を替へよ^よ遣はしたるに、直に持還れり。皆言ふ。何にして早きやとて、蓋^{かた}をとり見るに、酒なし。又曰。宴いま始れり。何にしてかくなるやと問ふ。木面答ふ。御銚子の替りと云たれば、取



図1 宋紫石「水辺書斎図」 松浦史料博物館蔵

次の人ないと言たるゆゑ、酒無と思たりと（予が領邑の方言、^{オセヒ}応辭をないと云ふ）。

（参照）松浦静山『甲子夜話統篇』二、『東洋文庫』三六四、平凡社、一九七九年

○松岡明子氏が紹介された天明七年（一七八七）の高松松平家分限帳には「定江戸」として楠本雪溪の名前が見えるという。宋紫石はその前年に世を去っているのので、これは宋紫山のことであろう。

（参照）松岡明子「松平頼恭図譜の画家」、「国立科学博物館叢書』一『日本の博物図譜』所収、二〇〇一年

○宋紫山が原図を描いた天明九年（一七八九）の大小歳旦「象図」一枚（銀座東京羊羹本舗蔵）が大久保純一氏によって紹介されている。「太平有象」と題し、続いて「天明九年己酉孟春 宋紫山寫」
[印] [印]の落款がある。象の姿態は父紫石が『古今画藪後八種』に収録した享保渡来の象と類似する。

（参照）狩野博幸「清長と錦絵」、「日本の美術』第三六四号、至文堂、一九九六年

○近世江戸における書画会の始まりは安西雲煙著『近世名家書画談』によれば寛政四年（一七九二）正月十七日、柳橋萬屋においてのことであった。参加者は鈴木芙蓉、鐫木梅溪、谷幹々、谷舜娛、

谷文晁、春木南湖、宋紫山の七名で、紫山は蓮を手がけた。ときに六十歳。

（参照）坂崎坦編『日本画論大観』、アルス、一九二七年

【晁有輝（朝岡豊興）】

○宋紫石から絵を学んだ旗本に朝岡豊興（一七三九～一八一）あり。『近世逸人画史』に「晁有輝、名は豊興、晩に柏亭と号す、本姓朝岡、九兵衛と称す、東都幕府の士なり、画を宋紫石に学ぶ、花鳥墨竹あり」と記載される。

『寛政重修諸家譜』の「朝岡」の項は「豊興（幸市 左京 母は某氏）寶暦十年十一月八日遺跡を繼（時に二十二歳、采地五百二十石餘）二十五日はじめて浚明院殿にまみえたてまつり、十二年三月十六日西城御書院の番士に列し、寛政二年四月二日より本城に勤仕す、妻は安藤彈正少弼惟要が女」と記し、また『寛政呈書（万石以下御目見以上）国字分名集』（寛政十一年＝一七九九）は「朝岡左京豊興 五百二十石九升九合 知行地相模、上総、下総 本国三河年齡未六十一歳 役職御書院番六番 寺麴町心法寺 屋敷三番町」（『江戸幕府旗本事典』原書房による）とあるから公称では元文四年（一七三九）出生となる。没年は『増訂武江年表』文化八年（一八一）条が「七月四日、晁人晁有輝卒（麴町心法寺に葬す）」と記し、文化十五年刊『江都諸名家墓所一覽』には「麴町心法寺 晁有輝墓

浅岡氏 名豊興 字詩叔 文化八年七月四日」と一致するが、現在の心法寺には朝岡氏合葬墓一基を残すのみで、豊興個人の墓碑は現存しない。

現存する絵画遺品も稀である。「寒雀争梅圖」と自題して「晁有輝寫」の款記と「晁氏」「有輝」の二印を捺す墨画花鳥図一点【図2・3】と、「晁豊興寫」と款して「豊興印」「詩叔」二印をもつ淡



図2 晁有輝「寒雀争梅圖」

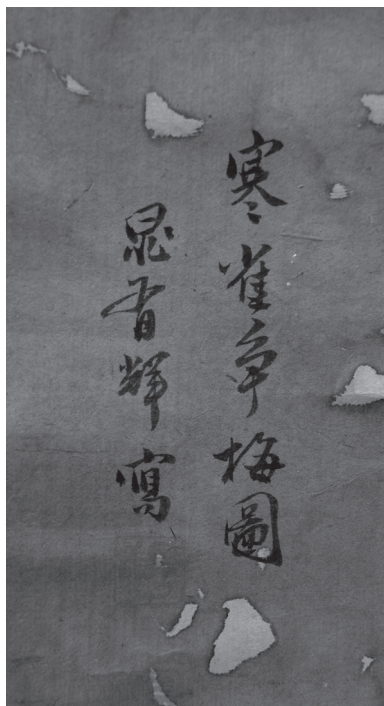


図3

彩山水図一点【図4・5】を確認したのみである（東京・個人蔵）。

【徐皞晋（久間貞八）】

○平戸藩松浦家の南蘋派画人である徐皞晋（通称久間貞八、一七五二～一八一三）については以前簡単に紹介したことがあるが、彼が



図4 晁有輝「山水図」

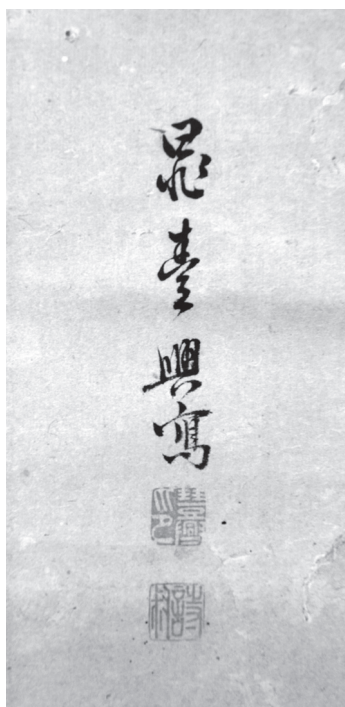


図5

宋紫石から画を学んだことを示唆する記事が前田香雪著『後素談叢』の巻三に収録されていた。

久間鍾翁は通稱を寛治といへり、平戸の松浦藩士にて文化文政頃の人にて藩主靜山君の眷遇を得て用人格たり、江戸定府にて他に出ざりしも宋紫巖の畫風をよく學びて花鳥を巧みにかけり、漢學にもくからざりしが此比の風として唐めきたる名をつくるをよきこと、したるにや、畫には徐暉進（こくへいしん）とかけれるが多しと見え一二見たるもの皆細楷にて徐暉進とかけり、初め見たるとき清人の明畫に摹仿したるものと思へるに、文字に和臭ありまた畫も支那人ならぬところあるを發見したるより長崎の畫工にもやと思ひて彼地の人にも問ひ合せたる事ありしに、何ぞ量らむ松浦伯爵家の舊臣にてそか、けるもの今もありとて出して示され又その名などを詳知することを得たり、鍾翁常に云、花卉は人の庭園あるは花戸に就てみるも容易なれと鳥は自由（ゆ）に飛翔するもの其ものに接するも所在近からずして羽毛の詳細を看取することは頗る至難なり、ことに江戸は喧騒の地にして野鳥水禽の栖息する處に乏しければ其眞を知ること容易ならずとて一二の飼鳥屋にたのみ入れ暇あれば行て寫せるほどゆゑ、奇鳥かはりもの、如きは勿論もらさず寫生してたくはへ臧せりとぞ、其道の爲に勞苦を厭はざりし篤志は甚だ愛すべし、

文中の宋紫巖は宋紫石の師である来舶清人で、宝曆十年（一七六〇）に長崎で客死しているから、徐暉晋が直接学んだ可能性は低い。江戸定府であれば、紫岩の画風を宋紫石あるいは紫山から習得したという意味であろう。ついでながら近年見出された徐暉晋筆「木蓮図」（東京・個人蔵）には「暘谷晋」のサインと「久間晋印」「徐暉」二印があり、暘谷の号が確認された。

（参照）前田香雪『後素談叢』、『藝苑叢書』所収、一八九八年起稿

「―はるかなる千年の歴史―平戸松浦家名宝展」図録、朝日新聞社西部企画部、二〇〇〇年

【森蘭齋】

○熊斐の門人であった越後の森蘭齋（一七四〇―一八一）が江戸へ移居し、日本橋稻荷新道に落ち着いた様子を報じる手紙が、蘭齋の国元である妙高市新井に残されている。年不明七月二十二日付で荒井中町の金子芦州あて。

七月三日出尊札当月十四日二相達忝拝見仕候、先以尊家御揃被遊御安康珍重不斜奉存候、当方私共無異二罷有候、乍憚御安慮奉希候、然者私義（まじ）当月廿五日着仕候而所々家見立候處、去冬之出火此方、宜敷明家ハ借つくし候、漸日本橋稻荷新道と申處

賣家有之、随分安ク手ニ入相整申候、乍去手入普請ニ餘程相懸り漸當時引取安氣仕候、乍去場所も日本橋、左右者丸之内へも又者江戸中何方へも通用宜、名ヲ開メ候ニハ第一之場所ニ候、尤此邊六尺一間十二匁之所ニ候、通町うら店ハ五匁ニ候、私宅ハ日本橋二丁南、白木屋の向横丁、稲（荷脱カ）新道と申所ニ而至極しつか成所ニ候、通モ少ク夫故借賃安ク一坪四匁之場所ニ候、尤私家買取、地代斗ニ而一ヶ月三匁宛、尤間口五間裏六間、間数も私国の家々住居勝手大宜、委細絵圖ニ認、如蘭様へ上候間、御覽可被遊下候、何卒近年ニ御出府御待申上候、多四郎様より御聞被遊下度候、

一、画帳之義上州ニ而門人共之内十人斗為候、扱又当所ハ段々頼可申積ニ奉存候、尤江戸中御大名様方始メ其外書画数寄之程者名ヲ不致者無之、尤當時唐画ハ松林氏此地の先生と申伝、餘者三四段も落候事故、今而者唐画之巧一向ニ無之候、尤和画も洞春斗被行候様子ニ候、是も取不たら、先參而一向并者無之候、依之毎日尋參候人多ク、乍去未夕画も初不申、古家之手入普請襖張替坏ニ而入門等者先行延置候、此分ニ候ハ、何の骨折もななく当所ハ開ケ可申候、尤上野も首尾上々吉、段々様子追々可申上候、（下略）

文中に云う「去冬之出火」を、寛政五年十月二十五日に湯島松平雲州侯別邸から出火して神田から日本橋あたりまでを焼いた火災と

見れば、この書簡は寛政六年（一七九四）のものか。稻荷新道は日本橋通一丁目、白木屋の向横丁であつた。書簡の後半は、おそらく金子氏から依頼された寄合書画集の収集作業に関する内容であろう。松林氏は熊斐門人である松林山人。今は唐画の名人がいらないというのは、松林山人が前々年八月十二日に他界していることをさすか。それ以外は三四段もレベルが落ちるとは、宋紫山に対する当てこすりのようにも読める。また、和画の名手として言及される狩野洞春美信（一七四七～九七）は表絵師駿河台狩野家の画家。奥絵師四家を差し置いて筆頭に挙げられている当時の世情が窺われる。

○文政三年（一八二〇）の跋をもつ池田冠山編『浅草寺志』巻二には、同寺本堂に森蘭斎が寛政七年（一七九五）と同八年に描いた絵馬二種があることを記す。一つは「○關羽畫額 寛政七乙卯十一月朔旦 北越蘭齋森文祥畫」であり、もう一つは「○孔雀畫額 寛政八年丙辰八月朔 蘭齋森文祥」であつた。しかし『増訂武江年表』によると、その天保十一年十月十三日、「浅草寺本堂修復成就」の項に斉藤月岑は「此時迄本堂に曾我蛇足が末孫寂叔が筆の惟茂鬼女の額、蘭斎文祥が筆の関羽額、鈴木芙蓉が筆の豫讓の額等ありしが普請の時はずしたる儘再度掲る事なし惜むべし」と記し、続いて喜多村筠庭の補正は「筠庭云、浅草寺本堂の額、此時より見えぬもの猶あり、古き額にて揚香が虎を逐ふ図なくなりて今岸良が画見えたり、蘭斎が孔雀などもなし、江漢が油画周防錦帶橋の図、これは本

堂修復前より見えず」という。蘭斎の絵馬は天保十一年以降、二点とも行方が知れない。

(参照) 池田冠山『浅草寺志』、浅草寺出版部、一九四二年

○これらの絵馬奉納に際して、江戸日本橋稻荷新道の蘭斎から上野国宮崎の岩瀬庄右衛門らへ贈られた書簡が二通現存している。寛政七年(一七九五)六月七日付と九月十二日付のうち、前者を取り上げる。

一筆啓上仕候、先以大暑之節各様御揃御安康可被遊御座候哉、恐喜不斜御義ニ奉存候、当方野子家内無異勤仕候、乍慮外御安慮可被遊下候、然者私兼々志願有之ニ付、何卒浅草江繪馬奉納仕度存念ニ付、此方門人衆へ噂仕候処、各々聞受宜敷、殊ニ上野ニ茂手筋有之、私在所々出家致候而只今御使番浅草寺之懸り役ニ而、場所も忝ク候正面軒方ニ懸ケ候儀、是又願書指上候所、右之代取持ニ而永代懸ケはつしなしニ出来候、然所横九尺堅壺丈三尺、圖者一ノ宮ニ奉納同様ニ候、然所右銀子懸り致、奉納料者金五両ニ而宜敷、然共懸り役人十人餘、是ニも少し宛付届候、扱金物ハ止ホウノ木ニ而ふちハ登龍下り龍一面ニホリ上候、□付木地紫丹ニ致し地□□上金地板巾九尺二尺堅二間一尺筋なし白□桐ニ皆地板、十両懸り相懸り候、惣入用三十両程ニ相成候、乍去此節仕候ハ、最早二度難出来、誠ニ四海ニ并もなく上

出来ニ仕度、匱末之仕立ニ仕候位ニ而ハ不致方も又宜候、圖取立候間入御覽候、私義三ヶ月引込、繪具等不及申奉納ニ仕候、私義二十両程之奉納ニ候、此節致懸り候積りニ候へ共、得と方かへヲ見候處、丑寅ノ間ニ当り候故是ニ指支候、殊ニ未夕間も無之当地之門人衆も少し難儀ニ申分も有之、乍然是當年ハ延し可申候哉と奉存候、未夕延ニ決シ候ニ茂無之先十二九ツ春ニ致可申候、何方此度者私も大願之事故、明春取懸り候節者各様御身分相應御寄進奉願上候、左茂無之候而ハ上分ニ難出来、誠ニ天下并無程ニいたし置度奉存候、扱右圖者はか本紙ニ候、乍去延候も幸、何卒各々様得と御覽被下候而形等ニ無利奉願事坏有之候ハ、誠ニ御深功者此事ニ候間、皆々様御所存之程口上書被成下此下画ニ御張被下偏ニ奉願候、(下略)

などと絵馬の体裁や奉納位置を報じ、永代掛けははずししの許可を得たと知らせる。あわせて、それやこれやの総費用が三十両ほどかかるため、庇護者たちへ資金援助を無心した。また絵馬の下絵をあわせて送付し、図様の校正依頼や願文の追加を尋ねている。

(参照) 東京都立中央図書館蔵東京誌料・軸物「森蘭斎先生書簡」

○梅澤和軒著『増補日本南画史』第八章、森蘭斎の項に「門下に岸駒あり。岸駒初め蘭斎に師事し、自ら蘭斎と號す。人怪んで詰れば師は『越後の蘭斎』にして吾は『越前の蘭斎』なりと答きとぞ、其

の傲岸の態度を見るべし。」とあり。

（参照）梅澤和軒『増補日本南画史』東方書院出版、一九二九年

○上毛の画人金井烏洲の『無声詩話』に、森蘭齋門下の女性画家が収録されている。「玉嫺女史、名麗花、町田氏、上毛人、父某仕尹、基于大坂、女亦隨、性嫺雅、學畫於森蘭齋、寫四君子、墨竹殊妙、得李用雲蕭疎之風致、嫁士人松井某、歿江戸」。町田玉嫺の遺作は見ることがないが、来舶清人李用雲の風致を得たという文言から推察する限り、南蘋系の濃彩花鳥画よりは簡素な水墨四君子を専らにしたようである。蘭齋と上野国の関わりを補強する資料といえようか。

（参照）坂崎坦編『日本画論大観』、アルス、一九二七年

おわりに

一覧してわかるように、本稿は落穂拾いのように散らかった文集である。しかしながら、落穂も埋もれてしまったのでは画人伝研究にとって差し障りがあるうかと考え、ここに掃き寄せておくことにした。冒頭にも述べたが、南蘋系の画家たちは、直接間接に影響を受けた者をあわせれば膨大な人数に上り、ここに取り上げ得たのは、ほんの僅かにすぎない。引き続き、時間の許す限り紹介を続けていきたい。